



Title	河内地域における釘付式木棺の導入：百済系文物導入の一様相
Author(s)	平井, 洸史
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 389-398
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105056
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

河内地域における釘付式木棺の導入

—百済系文物導入の様相—

平井 洸史

はじめに

古墳時代中期、のちに畿内と呼ばれる地域（便宜上、畿内地域と呼称）では、横穴式石室墓制と不可分の関係において釘付式木棺が導入される。百済との関係で説明されるこの変化（岡林 1994、吉井 1995）を主導したのは、王権中枢地域である河内地域と大和地域の古墳被葬者たちであり、前者については、藤の森古墳や高井田山古墳が初期横穴式石室に伴う事例として著名である。また最近では、一須賀古墳群の棺釘の様相も公表が進められており（平井 2020, 2021、久永・平井 2024）、それらを踏まえた動向を整理する必要がでてきた。そこで、本稿では河内地域の事例検討を通じて、釘付式木棺の導入について考えることにしたい。

1. 研究史における課題と釘・銚の分類

釘付式木棺の受容様相についてはこれまで多くの研究（田中 1978、岡林 1994、吉井 1995）がなされてきたが、とくに導入期に主眼を置き、本稿との関連が深いものとして瀬川貴文と佐藤純一による検討がある。瀬川は、古墳群ごとの時期的変遷および地域間比較を行うことで、「釘結合式木棺」の受容様相解明における大きな成果を上げた。とくに TK10 型式段階までの地域様相として、畿内地域で主に横穴式石室で大型の棺釘が使用される一方、瀬戸内沿岸地域で朝鮮半島系竪穴式石室に「折曲型」の小型ないし中型の棺釘が使用されるとした点は、本稿との関係で注目される（瀬川 2005）。また、中期の銚と釘を対象にその導入様相を検討した佐藤も、近畿と九州とでは、前者が X・I 型（本稿の有頭式 1 類）を主に用いる点で、Y・III 型（本稿の無頭式 3 類）を使用する九州地域とは異なるとした（佐藤 2007）。

指摘された畿内地域の傾向は、巨視的にみると該当する部分が多い。ただし、資料の増加した現状ではそれに当てはまらない事例も一定数認められる。例えば、後述するように、河内の導入期にも中型・小型の棺釘が一定数認められるうえ、折曲式が主流型式の一つであり、奈良盆地南部に集中する有頭式 1 類を畿内地域の全体傾向とみなすのは難しい。

このように畿内地域の内実を十分に把握できなかった一つの要因としては、釘付式木棺の主

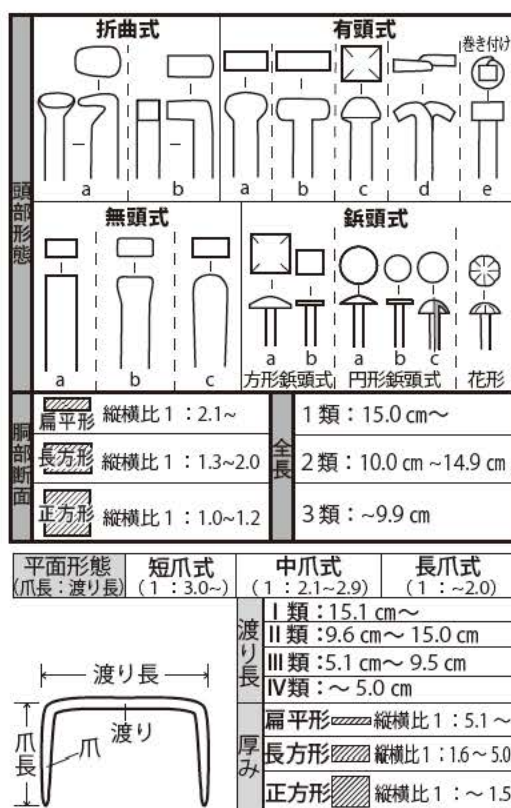


図1 釘と鋸の分類

等を含めた概念として釘使用木棺とし、釘のなかでも棺に用いられるものを棺釘と呼ぶ。

2. 藤の森古墳の棺釘と鋸

まずは、河内地域最古の釘付式木棺と目される藤の森古墳からみていく。古市古墳群に含まれる藤の森古墳は、畿内地域の初期横穴式石室導入例として著名な径約 22 m の円墳である。時期としては、埴輪が野中古墳に後行する特徴を持ちつつ（小浜 1993）埴輪検討会編年の IV 期 2 段階と考えられ、須恵器型式との対応では ON46 型式段階を中心とした時期（木村 2022）と理解できる。その横穴式石室の性格について、北部九州の影響を指摘する見解もあるが、近年の韓半島における新資料を踏まえた太田宏明の検討（太田 2019）によれば、北部九州を介することなく百済から導入されたものと理解することが妥当である。なお、横穴式石室では追葬を考慮する必要があるが、当古墳の場合、玄室の規模からして玄室内には一棺のみであった可能性が高く（安村・桑野 1996）、棺は古墳築造時期に帰属すると考えられる。

棺釘の特徴 棺釘については藤田道子による検討があり、頭部数により計 21 本以上であると

導地域でありながら資料が明らかでなかった河内地域の存在が大きい。また、棺釘は、棺単位、古墳単位、群集墳単位等にもみる傾向が重層となってより大きな地域性を形成しているため、その実態把握には、個別的な分析から始め、単位ごとの傾向を意識した検討が求められる。本稿はこうした課題意識をもって、河内地域（とくに中・南河内地域）の釘付式木棺の導入様相について考えてみたい。

検討に先立ち、釘の分類を示す。多くの先行研究（田中 1978、金田 1996、瀬川 2005、佐藤 2007、平井 2021）により提示された頭部の形態を重視したもの踏襲しつつ、修正を加え、図 1 のように行う。鋸も図 1 のとおりとする。

また、釘を用いる木棺の名称について、本稿では岡林孝作の理解（岡林 1994）を踏襲し、棺身を釘で繋結した木棺のことを釘付式木棺とする。そして、蓋の固定にのみ用いる事例

指摘された。形態的特徴としては、折曲式で占められ、最長の個体で残存長 13.4 cm を測る。付着木質には、繊維の方向により岡林分類（岡林 2018）（図 3）の A 型と C 型が確認されている（藤田 2019）。

13.4 cm の最長個体は先端を欠損したもので、完形品であれば 14 cm 弱に復元できる。完形品には 11 cm 台のものも含まれるが、他の個体の復元長も踏まえると、全長がおおよそ 12 ～ 13 cm を中心とする一群であったと推測できる。本稿分類では 2 類に該当し、釘付式木棺の緊結に支障のない長さである。また、総本数としては、新たに頭部片 1 点が確認されたため、22 点以上が当古墳の木棺に使用されたことになる。釘付式木棺の良好な事例における釘の最少本数は寺口忍海 H-15 号墳の 7 本であり（岡林 1994）、当古墳例は十分な本数を備えるといえる。また、付着木質のうち A 型は、側板と小口板との緊結に用いられるものと考えられている（岡林 2018）。つまり、こうした釘の大きさや本数、付着木質から、蓋の固定のみに釘が用いられるといったものではなく、棺身を釘で緊結する釘付式木棺であったことが判断可能となる。

釘付式木棺に伴うことが明確になったところで、詳細にみていきたい。まず、頭部形態は、鍛打により薄く広げたもので、折曲 a 式に属する。胴部の断面形態は基本的に正方形であり、中央で一辺約 0.9 cm を測る。また、付着木質には、B 型もみられ、側板と小口板（A 型）、底板／蓋と側板（B 型）、底板／蓋と小口板（C 型）の緊結に

【図版はインターネット非公開】

図 2 藤の森古墳の棺釘と鏝

【図版はインターネット非公開】

図 3 付着木質（No. 13）と付着木質の分類

表 1 藤の森古墳の棺釘

番号	全長(cm)	木質類型等	番号	全長(cm)	木質類型等
NO. 1	(13.4)	A 型	NO. 12	(12.2)	C 型 / 26
NO. 2	(11.0)	68	NO. 13	11.2	C 型斜行 / 112
NO. 3	12.8	B 型 / 92	NO. 14	(9.1)	75
NO. 4	(8.8)	B 型 / 103	NO. 15	(7.4)	
NO. 5	(10.1)	C 型	NO. 16	(6.8)	71
NO. 6	10.4*	C 型 / 復元長 12.7	NO. 17	(5.9)	78
NO. 7	(11.7)	A 型 / 107	NO. 18	(6.1)	90
NO. 8	(13.4)	A 型 / 75	NO. 19	(2.9)	
NO. 9	(12.2)	A 型 / 30	NO. 20	(3.5)	
NO. 10	(12.6)	B 型	NO. 21	(2.8)	
NO. 11	(11.8)	A 型か	NO. 22	—	頭部のみ

() 内は残存長。備考内番号は遺物注記番号。

釘が用いられたことが判明する。貫通材の厚みのわかる資料もあり、A型の貫通材は3.5 cm 2点と5.0 cm、B型は4.3 cm、C型は7.8 cmと4.7 cmと5.1 cmを確認できる。A型の差は左右の側板の差を、C型の差は底板と蓋の差を反映している可能性があるが、仕口加工なども考慮する必要がある。そのほか、胴部上半で水平方向、下半でそれと直交する面に斜め方向の繊維を残す資料がある(図3)⁽¹⁾。この繊維方向は、底板／蓋板を貫通し斜めに小口板に貫入した場合に生じると考えられ、平らな底／蓋に対し意図せず斜めに打ち込んだ可能性とともに、蓋が蒲鉾形のように湾曲していた可能性の両者を想定できる。

先行事例との関係 当地域の釘付式木棺導入以前の釘使用例としては、同じ古市古墳群の野中古墳の器物埋納箱がある⁽²⁾。当例は、出土状況と付着木質の観察から、蓋と身の結合にのみ用いられたと考えられる(北野編1976)。釘の形態は同じく折曲式であるが、頭部を薄く広げるとはせず(折曲b式)、胴部断面形は長方形で、藤の森古墳例とは少なからぬ差異がある。折曲a式は藤の森古墳で新たに導入された型式と評価すべきであろう。範囲を広げれば、釘付式木棺の加古川市池尻2号墳例が比較対象となるが、これも胴部断面が長方形の折曲b式であるため、藤の森古墳例が釘付式木棺に伴う折曲a式の最古例として位置づけられる可能性は高い。

釘付式木棺に伴わない鏝 鏝は計7点が出土しており、爪数から4点以上が使用されたことになる。渡り長は最大のものでも残存長4.4 cm、爪長はすべて3.6 cm以下である。断面形も平均で0.7 cm×0.3 cmの長方形であり、木棺の鏝としては華奢すぎる。時期の近い類例としては、百舌鳥古墳群の湯の山古墳例を挙げることができる。これも欠損のため渡り長は不明だが、爪長2.9 cmを測るもので、爪長2.3 cmや2.8 cmの個体を含む藤の森古墳例と形態的に近い。湯の山古墳は粘土槨に組合式木棺を伴う古墳であり、鏝は器物埋納箱に用いられたと考えられる。こうした例を踏まえると、藤の森古墳例についても器物埋納箱に用いられた可能性が高い⁽³⁾。

ただ、当例のなかには爪の先端を内側に折り曲げた個体を確認できる(図2-4)。これは、板材を並べて継ぎ合わせる際に貫通した先端部の処理手法と理解され、中期の主な使用法である身と蓋の緊結にはみられない特徴である(岡林2015)。岡林が「後期的な」使用法と呼ぶこの使用法の最古級例がみられる点には、当古墳の先取的性格をうかがうことができよう。

藤の森古墳例の性格 当古墳の棺釘は、先行例と直接的な連続性を見出すことは難しく、その採用背景にはまず横穴式石室同様に百済からの影響を想定すべきである。ただし、漢城期の百済において主流をなす棺釘が、後述する方形鋌頭式や有頭c式の釘である一方⁽⁴⁾、折曲式のみで構成される例はごくわずかで、折曲a式はさらに稀な存在となる。つまり、当古墳が方頭系の棺釘を採用していない点は、釘付式木棺導入が細部を含めた完全かつ総体的な姿ではなかったことを示唆し、そうであれば河内で既に存在した折曲b式の製作技術がそこに入り込む余地もあったことだろう。同時に、当例のような特に広い頭部の折曲a式が在地的に生じたものとすれば、両地域の技術的融合のうえ、木棺表面に大きな頭部上面をみせる方形系統の釘形態を

意識して作られた可能性も浮上する。なお、当例の棺材は、漢城期百済の釘付式木棺で確認されるイチイや松（金 2022）ではなく、倭的なコウヤマキであった（藤田 2019）。こうした様相は、当古墳の石室が堀方をもたない点に在来技法との融合をみた指摘（太田 2019）とも調和的であり、当古墳における百済を遡源とした横穴式石室墓制の導入実態を示している。

3. 高井田山古墳の棺釘と鏝

柏原市所在の高井田山古墳は、藤の森古墳と規模の近い円墳（径 22 m 前後）であり、TK23 型式段階に位置づけられる。横穴式石室の特徴および副葬品、木棺の配置や土器副葬様態、そして釘付式木棺の存在から百済との関係が指摘され、とくに石室の規模や副葬品内容から、百済の王族に匹敵する人物を被葬者として想定する見解もある（安村・桑野 1996）。その玄室内では、副葬品と釘の出土状況から、2 基の釘付式木棺が石室主軸に平行して配置されていたと推測される。西棺は盗掘を受けていたが、東棺は攪乱されておらず、付着木質を踏まえた検討を経て、釘 20 本を用いた木棺の姿が復元された（安村・桑野 1996）。

東棺の棺釘 まずは東棺からみていきたい。その頭部形態としては、報告書において「特別に頭部を作り出さないもの」、「一方へ折り曲げたもの」、「四方へ広がる形態のもの」が確認され、部位による使い分けはみられない（安村・桑野 1996）。このうち頭部を作り出さないものについては、実見を通じて型式判別が困難であったため、ここでは後二者について詳しく述べる。

「一方へ折り曲げたもの」（報告書番号 24、27、56）については、胴部に比べて頭部の幅が広く、厚みを減じていることから、折曲 a 式に含めて理解することが可能だが、そのうち図 4-1（報告書番号 24）は注意を要する。一般的な折曲 a 式では、頭部が隅丸方形や楕円形を呈することが多いが、本例は明瞭に長方形に整えられている。方形頭部を志向した入念な成形工程を経たことがわかる。また、折曲 a 式の胴部は頭部折り曲げ側の中央にとりつくことが普通だが、本例は著しく隅に偏り、頭部が三方へ広がるような形態である。これも一般的な折曲 a 式とは異なる工程を経たことを示す。外見上折曲 a 式と似てはいるが、頭部の製作技法は方形鋳頭式と共通する可能性も高く⁽⁵⁾、方形鋳頭式の模倣品と位置づけることが可能であろう。

【図版はインターネット非公開】

図 4 高井田山古墳の棺釘

「四方へ広がる形態のもの」は、本稿分類の方形鋌頭式ないし有頭c式に属する。方形鋌頭式と有頭c式とは頭部の広がりや扁平さに差異がある。当例に有頭c式が含まれる可能性は否定できないが、薄い傘状頭部が広く張り出す方形鋌頭式は確実に認められる（図4-2～4）。方形鋌頭式は、韓半島ではソウル石村洞古墳群をはじめ、百済中枢を核に一定の広がりをもつ。近年では城南板橋古墳群や河南甘一洞古墳群など、ソウル近郊の漢城期の横穴式石室墳で主流型式として採用されたことも判明しており（金2022）、そうした百済中枢との関係を示す型式が、倭でいち早く高井田山古墳に導入された点は、被葬者の性格を反映したものといえる。

ただし、方形鋌頭式は基本的に頭部上面が正方形である一方、高井田山古墳で図4-3のように長方形化した個体がみられる点や、胴部の取りつき位置が中心からずれた個体が一定数みられる点には注意を要する。故地においてこうした特徴がみられないわけではないが、とくに胴部の位置がさらに縁辺へずれると模倣品とした図4-1になるように、当資料群は形態的統一性をより欠いた様相を呈する。そもそも、当古墳の方形鋌頭式棺釘は、その全長が百済の事例よりもひと際大型のもので、倭で製作された可能性が高いものである⁽⁶⁾。加えて、棺材がコウヤマキであることから（安村・桑野1995）、釘を含む棺全体が倭で作られたと理解すべきであろう。こうした点を踏まえるならば、模倣品を含めた形態的ばらつきは、在地での製作過程で生じた可能性が高い。百済との密接な繋がりが説かれる高井田山古墳の場合でさえ、方形鋌頭式を導入しつつも、棺釘製作がそのまま移入されたと理解するのは難しい状況といえる。

その製作面における背景として、在地の鍛冶技術は見落とせない存在である。高井田山古墳において方形鋌頭式とともに使用された典型的な折曲a式の釘は、藤の森古墳ですでに採用されていた。また、棺釘に限らずいえば、野中古墳でも折曲式の釘が使用されている。もとをたどれば折曲式棺釘の系譜が百済を含む韓半島に求められるとはいえ、折曲式がさほど高度な製作技術を要さない点も踏まえると、既に在地の鍛冶技術として定着していてもおかしくはない（平井2021）。そうであれば、東棺の棺釘様相には、在地の鍛冶がより一層強く作用したものと評価できよう。ひとまずここでは、高井田山古墳の棺釘に百済中枢との関わりを示す方形鋌頭式が含まれる点と、在地における木棺の伝統や鍛冶との関係によって大型化をはじめとした形態的変容が認められる点の、内的・外的な両側面を確認しておきたい。

西棺の釘 西棺は攪乱の影響により状態良好な個体が少ないものの、3点（報告書番号1、7、18）が確実な折曲a式であり、方形志向の頭部成形がみられる。残る頭部2点（報告書番号9、10）は「四方へ広がるもの」とされるものの、胴部が一方へ偏って取りついており（安村・桑野1996）、方形鋌頭式の模倣品の可能性が考えられる。また、西棺にのみ使用された鋌は、渡り部の断面が扁平形志向の百済の例とは差異が大きく、その長方形の断面形態は、むしろ中期の倭で盛行する鋌との類似性が高い。「長爪式」（平井2021）とする釘付式木棺に多く用いられる形態へと変化しているとはいえ、百済系の鋌を受容せず、倭に定着した技術で製作された

銚子を使用している。東棺に続き、西棺でも棺釘および銚子が在地要素との混交が顕著にみられる。

4. 一須賀古墳群の棺釘

河内地域の代表的群集墳である一須賀古墳群の形成は、I 支群から始まる⁽⁷⁾。I 支群の棺釘については既に検討（平井 2020、久永・平井 2024）があるため、要点のみ述べると、まず特徴の一つに I - 18 号墳（中期後葉～後期前葉）の方形鉾頭式を挙げられる。現状、導入期の事例としては高井田山古墳と併せて 2 例のみである。地理的・時期的に近く、石室系統を同じくし（一瀬 1993、太田 2019）、ともに二棺並列埋葬を百済より導入する点と併せ、両者の深い関係を示唆する。また、I - 18 号墳には、高井田山古墳と同じく頭部上面形が長方形化した個体も含まれるなど、形態的共通性も認められる。ただし、高井田山古墳例が大型化しているのに対し、I - 18 号墳例は 10～12 cm 前後で占められる点で百済の様相に類似する。この点は、棺材の厚みを含め、在地的変容をさほど経ない形で導入されたとの解釈も可能であろう。

百済との関係で特に注目すべきは、板橋古墳群と甘一洞古墳群との関係である。これら古墳群は、ミニチュア炊飯具や釵子などのいわゆる「漢人系」器物を副葬している点で、I - 18 号墳をはじめ I 支群と共通性が高く、石室構造についても共通性が指摘される（権 2017）。倭の方形鉾頭式の展開をみると、I - 18 号墳以降継続しない。再び出現するのは明日香村上 5 号墳（TK43 型式段階）であり、その後、飛鳥を中心に類例を増やす。興味深いのは、大和の主要例である上 5 号墳と与楽イモリ 1 号墳が、ともに「漢人系」器物を顕著に副葬する古墳とあった点である。高井田山古墳については別途検討を要するが、これらの事例については、「漢人系」属性を共有する集団が当型式の採用に関与したと考えてよいだろう。

群集墳内の展開 I 支群の西小支群（中期後葉～後期前葉）では、現状 I - 18 号墳を除き方形鉾頭式はみられない。この様相に I - 18 号墳ほどの百済との関係を見出し難いが、小支群全体では、1 類釘を含まず、銚子を用いないという傾向にある（平井 2020）。板橋古墳群もこれと同じ傾向にあり、この棺構造に関わる特徴は系譜関係を反映している可能性がある。

ただし、他の支群をみると、WA - 11 号墳で折曲 a 式 1 類が出土しているように、後期前葉には大型品が導入される。B 支群や D 支群も同様に折曲式・無頭式 1 類がみられ（平井

【図版はインターネット非公開】

図 5 一須賀 I - 18 号墳の棺釘
（久永・平井 2024）

2020)、さほど間を置くことなく、折曲式と無頭式を主流とする河内地域の在地的様相（平井 2021）が当古墳群において形成されていったことがわかる。なお、こうした様相は後期前葉より造営がみられる、平尾山古墳群、高安千塚古墳群も同様と考えられる（平井 2021）。

5. 大和地域との比較にみる河内地域の特徴

奈良盆地南部では、中期に遡りうる事例として、坂ノ山 4 号墳、稲村山古墳、稲荷西 2 号墳、双築 2 号墳、寺口忍海 D-27・H-16 号墳を挙げられる。小地域性（平井 2021）を含みつつも有頭式が優位であり（金田 1996）、導入期はとくに方形鋳頭式と系統的に近い有頭 c 式が多くみられる。そして最古段階の坂ノ山 4 号墳（TK208 型式段階）で既に大型品が主体となる点も特徴的である。これら有頭 c 式は華城市馬霞里・官項里古墳群や燕岐松院里古墳群、清州新鳳洞古墳群でよく似た形態がみられ、なおかつ大型品を含む点で共通する。系譜関係の推定材料となろう。有頭 c 式は、その変容形態の有頭 a 式、b 式を伴いつつ後期を通じて継続する。この定着様相は方形鋳頭式には認められなかったもので、河内地域では方形鋳頭式が継続せず、中期中葉に導入していた折曲式が無頭式とともに主流型式となり、胴部断面の長方形化も生じる。両地域とも在地的変容がみられるわけだが、導入系譜に加え、展開過程にも差異が認められる。

また、両地域とも、「漢人系」を含む渡来系要素が伴う群集墳での導入が目を引くなか、河内地域において、帯金式甲冑を副葬し首長墓的性格を有する二古墳がいち早く導入している点には注意を要する。地域性の背景には、導入系譜をはじめ多くの要因が絡むと推測できるが、こうした導入主体の社会階層差も、伝統的要素の重視度合い（倭系属性の継続度合い）や、使役する在地生産集団の違いを生み出すといった意味で要因の一つとなるだろう。

おわりに

今回、河内の事例検討を通して、「少なからずの変容が生じた」（吉井 1995 : p. 479）とされる導入様相の具体化に取り組んだ。藤の森古墳で折曲 a 式が新たに採用される様相、高井田山古墳で折曲 a 式が大型化しながら継承されつつ、百済中枢との関係を示す方形鋳頭式が採用される様相、一須賀古墳群にも方形鋳頭式がみられ、古墳間・地域間関係の深さが示唆される一方で、それが在地で模倣された可能性や、波及力をもたず継続性を認められない点、そして、比較的早くに折曲 a 式と無頭式を主流とする河内の様相が形成されていったことを確認した。

横穴式石室の受容の議論においては、外来的要素を強調する立場と在地的要素の継続性を強調する立場が分離しがちな状況から脱し、総合的検討によりその展開過程に迫ることが求められている（吉井 2018）。このことは釘付式木棺にも該当する。何が選択的に受容され、同時に

在地化されるのかに注意を向けながら、引き続きその展開過程についての理解を深めたい。

謝 辞

本稿執筆のための資料調査では、以下の機関と諸氏のお世話になった。記して感謝申し上げます。大阪大学考古学研究室、大阪府教育庁、大阪府立近つ飛鳥博物館、柏原市教育委員会、堺市博物館、藤井寺市教育委員会／泉真奈、市川創、上田直弥、河合咲耶、久永雅宏、肥田翔子、竹原伸次、山根航（敬称略・五十音順）。また、福永先生には、考古学の道へと進むきっかけを下さただけでなく、在学中厳しく指導していただきました。深く感謝するとともに、今後のご健康と一層のご活躍を祈念申し上げます。なお、本研究は JSPS 科研費 JP23K00940、JP22H00716 の研究成果を含みます。

註

- (1) かつて「D類」（崔 1992）とされていた類型とは、上下で直交する面に木質がみられる点で異なる。吉井秀夫は「D類」の存在が疑問視されることから設定を保留しつつ、将来的に本稿 A～C 型とは異なる繊維方向の釘が発見される可能性に触れた（吉井 2010）。斜行木質は高井田山古墳と一須賀 I－18 号墳にもみられるが、数量を踏まえた詳細な検討から蓋形態を復元する必要がある。
- (2) 百舌鳥城ノ山古墳では釘状鉄製品が出土したとされるが、現在所在不明のため評価が難しい。
- (3) 岡林は、千葉県金鈴塚古墳例（渡り長 5 cm 程度と 3 cm 程度）および兵庫県立石 103 号地点 C 群第 1 主体部例（渡り長 3.8～4 cm 程度）を、付着木質を踏まえた検討のうえで、木棺以外の小さな木箱に用いられたものと判断している（岡林 2015）。両例は藤の森古墳例ともサイズが近い。
- (4) 天安以南では円形鋌頭式も多く使用されるが（シム 2013）、いずれにせよ折曲式は客体的である。
- (5) 例えば、後世の角頭釘と同様に筒状治具を用いた頭部成形の可能性なども考慮する必要がある。
- (6) 吉井は、導入期の鉄釘が百済のものに比べ長く、鏝座金具や飾金具の受容が遅れることから、釘付式木棺を含む横穴式石室墓制の導入において少なからぬ変容が生じたと述べる（吉井 1995）。
- (7) I 支群の形成開始時期について、高井田山古墳に近い中期後葉（TK23・47 型式段階）とするか、後期前葉（MT15 型式段階）に降らせるのかの判断の決定的根拠は欠けるものの、副葬品からの推定が困難な現状を踏まえ、石室構造から中期に含める見解（太田 2019）を重視する。

引用・参考文献

- 一瀬和夫 1993 「近畿地方」『季刊考古学』第 45 号 雄山閣、東京都：pp. 62-66
- 太田宏明 2019 「大阪府藤の森古墳の検討」『古墳時代中期の政権構造に関する基礎的研究—古市古墳群高塚山古墳出土資料の調査—』山口大学人文学部、山口：pp. 81-100
- 岡林孝作 1994 「木棺系統論—釘を使用した木棺の復元的検討と位置づけ—」『橿原考古学研究所論集』第 11 号 橿原考古学研究所、奈良：pp. 405-445
- 岡林孝作 2015 『古墳時代木棺の展開過程における鋌の基礎的研究』橿原考古学研究所、奈良
- 岡林孝作 2018 『古墳出土の釘に付着した材組織の観察からみた木棺の用材利用法と棺構造の復元的研究』橿原考古学研究所、奈良

- 金田善敬 1996「古墳時代後期における鍛冶集団の動向—大和地方を中心に—」『考古学研究』第43巻第2号 考古学研究会、岡山：pp. 109-118
- 北野耕平（編）1976『河内野中古墳の研究 野中古墳発掘調査報告』大阪大学国史研究室、大阪
- 金武重 2022「百濟漢城期の諸墓制と木棺についての試論」『河南甘一洞遺跡』（総論）高麗文化財研究院、京畿道：pp. 166-253（韓国語）
- 木村 理 2022「古墳時代中期の円筒埴輪」『埴輪の分類と編年』埴輪検討会、奈良：pp. 25-50
- 権五栄 2017「城南板橋百濟古墳群の性格」『板橋博物館』板橋博物館、京畿道：pp. 242-255（韓国語）
- 小浜 成 1993「調査のまとめと検討」『はざみ山遺跡発掘調査概要—藤の森古墳の調査—』大阪府教育委員会、大阪：pp. 25-30
- 佐藤純一 2007「釘・鋸の受容についての一考察」『考古学に学ぶ（Ⅲ）』同志社大学考古学シリーズ IX 同志社大学考古学シリーズ刊行会、京都：pp. 429-438
- 崔完奎・金鐘文ほか 1992『沃溝將相里百濟古墳群発掘調査報告書』圓光大学校、全羅北道（韓国語）
- シム・ファンソク 2013「百濟漢城期における横穴式石室出土棺付属具の検討」『漢江考古』9 漢江文化財研究院、京畿道：pp. 49-74（韓国語）
- 瀬川貴文 2005「釘結合式木棺の受容と展開」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学研究室、大阪：pp. 583-594
- 田中彩太 1978「古墳時代木棺に用いられた緊結金具」『考古学研究』第13巻第3号 考古学研究会、岡山：pp. 47-62
- 久永雅宏・平井洸史 2024「一須賀古墳群 I-18 号墳出土鉄釘の検討」『館報』27 大阪府立近つ飛鳥博物館、大阪：pp. 50-59
- 平井洸史 2020「一須賀古墳群の鉄製品—木棺緊結金具について—」『館報』23 大阪府立近つ飛鳥博物館、大阪：pp. 55-70
- 平井洸史 2021「古墳時代の和と河内における釘・鋸の消費様相とその背景」『古代学研究』230号 古代学研究会、奈良：pp. 1-19
- 藤田道子 2019「藤の森古墳から出土した鉄製品」『大阪府教育庁文化財調査事務所年報』23 大阪府教育庁文化財調査事務所、大阪：pp. 18-23
- 安村俊史・桑野一幸 1996『高井田山古墳』柏原市教育委員会、大阪
- 吉井秀夫 1995「百濟の木棺—横穴式石室墳出土例を中心として—」『立命館文学』542 立命館大学人文学会、京都：pp. 463-483
- 吉井秀夫 2010「大加耶系竪穴式石槨墳の「木棺」構造とその性格—釘・鋸の分析を中心として—」『朝鮮三国時代の墳墓における棺・槨・室構造の特質とその変遷』京都大学大学院、京都：pp. 9-29
- 吉井秀夫 2018「横穴式石室の様相」『日韓交渉の考古学—古墳時代—』（最終報告書論考編）「日韓交渉の考古学—古墳時代—」研究会「韓日交渉の考古学—三国時代—」研究会、福岡：pp. 332-338

挿図出典

図3右半：岡林2018を一部改変のうえトレース 図ほか：筆者作成。